

令和4年度 第1回魚沼市総合教育会議 会議録

1 日時	令和4年9月9日（金） 15:00～16:30		
2 会場	魚沼市役所 本庁舎 302会議室		
3 出席者 (敬称略)	魚沼市総合教育会議		
	役職	氏名	出欠
	市長	内田 幹夫	○
	教育長	樋口 健一	○
	教育長職務代理者	星 麻衣	○
	教育委員	八木 由美子	○
	"	浅井 誠哉	-
	"	桑原 哲哉	○
	魚沼市 事務局長 吉澤国明	学校教育課長 森山丈順	
	生涯学習課長 青柳洋介	子ども課長 関 祐樹	
	管理指導主事 島田昌幸	管理指導主事 角谷文昭	
	教育センター次長 須佐光行		
	学校教育課副参事 井口啓一		
	事務局 秘書広報課長 山田庸子	広報広聴係長 広瀬 大	
4 議事内容	市長あいさつ 議事1 「部活動の地域移行の具体的な方策について」 議事2 その他		
5 配布資料	日程及び関係資料		

6 会議録

市長あいさつ

(内田市長) 教育委員の皆さんには定例教育委員会に引き続いて、この「総合教育会議」への出席に感謝する。また、日頃から教育行政に本当にご尽力いただき感謝申し上げます。このコロナ禍でBA5が猛威を奮っており、第7波の中、私自身も8月中頃に罹患してしまい、療養期間中には日程変更や代理を立てる対応をしていただき関係機関の皆様に変な迷惑をおかけした。一人一人できる感染対策をきちんと取りながら、社会生活活動との両立を進めていかなければならないという状況であるが、罹患すると10日間は自宅療養になり、症状が治まっても外に出れない。隔離となり家族や地域ともコミュニケーションが取りづらくなると感じたところである。

今日は、「部活動の地域移行の具体的な方針について」であるが、昨年この会議では、「持続可能な部活動と学校の働き方改革の両立について」ということで、2年間に引き続いて「中学校の部活動」について議論をいただくこととなる。昨年の資料を見ていた

が、働き方改革の方向性という中で、部活動は必ずしも教師が行う必要がない業務という風にあるが、これは私の個人的な想いであるが、部活動は子どもたちに学校生活があって、その中で、部活が行われるというのが本来の姿であるというふうに思っている。そのことによって、様々な効果が上がっていくだろうと私は今でも思っている。その部活動が、地域で運営されるという部活動改革ということを進めていくには、相当の課題があって、それをクリアしていかないと出来ないことだろうと思っているところである。今日は、その答えを出すという場ではないが、子どもたちが主役であるという事だということを念頭において、皆さんから様々な角度で忌憚のない意見をいただいで進めさせていただければと思う。「部活動検討委員会」という組織が別にあるが、それとは別に、教育委員の皆さまとお話させていただいたため開かせていただいているので、本日はよろしくお願ひしたい。

議事（１）部活動の地域移行の具体的な方策について

（内田市長）教育委員会事務局担当から説明をお願いします。

（角谷管理指導主事）資料のとおり説明をさせていただきます。

まず、魚沼市内の小学校5, 6年、中学生、中学生保護者に対して、7月に運動文化活動アンケートを取らせていただいた。その結果について説明し、具体的な方策のところに移っていきたいと思う。まず、小学生に対しては、学校以外での習い事を3分の2程度の児童が行っているということで、中学生の部活は、3分の2くらいの児童は入りたい部活があるというふうに答えている。ただ、学校以外のものについては、逆に3分の1くらいの児童がこういうことに取り組んでみたいという意見を持っている。

続いて、中学生のアンケートからうかがえることは、今の中学校で行われている部活動の活動が大変充実しているということが分かる。やりがいがあるし、相談する仲間がいるとか指導者の希望についても問題が無い。時間についても今の活動の時間がちょうどいいというような意見がある。実際は、今までチャンスがないが、部活動以外で中学校時代に取り組みたい部活動があるということ3分の1くらいの生徒が考えている。活動内容については様々で、長期にわたってチャンスがあればやってみたいと考える生徒がいるというふうに聞いている。

次に、小学校の保護者にとったアンケートでは、活動について一番大事にしていきたいのは「人間的に成長すること」や「スポーツや芸術を楽しむ」ということに期待しているということがうかがえる。逆に、地域移行についてそのことで心配されることが、会場への送迎があるかということ小学校の保護者の方は心配している。次いで多いのは、参加するクラブの内容ということになる。

続いて、中学校保護者で、部活動の活動に期待することは、小学校保護者と同じように「人間的に成長する」ということが一番多い。そして、活動時間についても今のガイドラインに沿った活動がちょうどよいと考えている保護者が殆どである。そして、休日に部活を行うことに対しての心配については、学校と学校の部活動の連携がうまくいくのかということ、一番心配しているということである。また、専門的な資質を有する指導者を確保できるのかということについても心配している事がうかがえる。

続いて、教職員のアンケートでは、教職員は担当している部活動やそういった今の現状についてをそれぞれ答えているが、これが地域移行となったとき、教職員はある条件のもと兼職兼業という形で部活動の指導者として指導することができるが、兼職兼業許可を得たうえで生徒を指導したいと考えているのは、今現在 17%である。どちらとも言えないものを合わせれば3分の1ということとなる。

教職員の全県調査が、先日行われた。まだ結果は出ていないが、県全体の結果としても、今後、検討材料とする必要があると考えている。このようなアンケートに基づき、今ある部活の体制を維持しつつ、地域へ移行していくというのがいいのではないと考えている。地域部活動による部活動改革ということで、部活動を補完し、連携するスポーツ、文化活動であるため魚沼市が制定している中学校部活動の在り方にかかる方針に準じた活動を行うというのが前提になる。運営主体は、申請することでそれに係る施設使用料の減免や大会参加費等の補助を受けることを前提に進めていきたいと考えている。参考というところで、新潟県全体の年齢別推移人口を0歳、5歳、10歳、15歳そして15歳を100%としたときのそれぞれの年齢でのパーセンテージということになる。魚沼市の年齢別人口であるが、県の方向よりも、少し大きく魚沼市は減少していく事が分かる。10歳が8割、5歳が7割、0歳では半分の50%というデータがある。このことを踏まえ、少子化による活動を今の活動のように維持していくことの難しさがうかがえる。

子どもの数が減れば、それぞれの学校の教育者数も減る。今ある部活動を維持しながらやっていくのが難しくなってくるというようなことが考えられる。そこで、次の2つの活動を立ち上げることで、今後地域部活動としていくことを具体的な方策として立てた。

一つは、「学校クラブ」という活動である。今回は、休日の部活動の地域移行なので、休日の部活動を補完するため、部活動にある種目、今、学校にある部活動の種目を基準として活動団体の管理下で行う地域の部活動である。今後、学校管理下外で行うことになっていくが、移行期においては、学校の管理下で行うというふうに考えている。地域の取組に沿った活動に移行していけるようなコミュニティスクールにおける学校協議会で運営方針を承認し、実施するといった形である。今までの学校の部活動についても同じように校長先生の方針について承認し、実施するということと変わりはない。

もう一つが「魚沼クラブ」という活動である。部活動の有無や、中学校区に関わらない活動のことで、希望者が運営主体の管理下で行う活動である。いわゆる部員数が少なくて学校の部活にない種目に参加したい生徒とか、他校の生徒と一緒に練習する環境が欲しい、部活にない種目に挑戦したいということで、そういった活動の場所を多様化し、生徒のニーズに応えられるような活動を広げていくことで「魚沼クラブ」というようなものをこれから必要で、どういった活動環境が可能かということの研究し協議しながら設立していくということになる。イメージ図があるが、地域の部活動の中にはそれぞれの学校、学校クラブありますが、5つの中学校の学校クラブがあり、魚沼市全体の「魚沼クラブ」というのがそれぞれの種目に応じてあるというのがイメージになる。

具体的な協議事項である地域移行の具体的な方策としての①が、休日の部活動が地域の力を借りた部活動に移行しているということと、方策②として多くの機会の創出と多様なニーズへの対応をするために「魚沼クラブ」というようなクラブを設置していくというこ

とが具体的な方策ということになる。

今年度から令和7年度末までの移行ステップについて、それぞれ、流れ、休日の実施体制内容、クラブの形式、設置実施方法、指導方針についてまとめた表では、来年度から実際にやってみる、試してみるということで、地域へ移行可能な部活動から休日の活動については地域の指導者のみで活動を行い、進めていくということである。その移行の中で、実際の更なる課題や問題点、そして、修正事項について検証し、完全移行に向けて準備をすすめていくということになる。令和7年度末までには、完全に部活動については移行、また、「魚沼クラブ」の方向性についても各競技、種目、活動団体において設置できる可能性、必要性について研究、協議をしながら「魚沼クラブ」の設置に向け、協議していくということになる。

保護者のアンケートの中にもあった、移動手段に対する不安や、また国では受益者負担で運営していくということを出しているが、このように部活動を補完するというような形であれば、今の部活動に補完する状態とあまり変わらない状態で移行していけるのかなという風に考えている。

保険については、どういう形にするのかということになるが、移行の間は、学校の管理下として行うわけなので、今まで通り学校の保険を適用として行けるのではと考えている。また、移動についても、今までの学校部活動と同じように移動していくことについては、「魚沼クラブ」においては移動する手段が必要になってくると考えている。そういった保護者の不安も余り大きくならないようにしたいと考えている。

最後になるが、令和4年度からの実施内容について、基本方針を策定すること、そして各種制度設計を進めること、そして教職員、地域、保護者に対する説明、周知を行っていくこと、「魚沼クラブ」を検討すること。また、運動部だけでなく美術関係者等とともに協議をすすめ、その地域移行についても協議を進めていくということになる。具体的なスケジュールは書いてある通りだが、また、様子を見ながら気になる部分もあると思う。令和4年度については、もう既にこのスケジュールで進んでいくということでアンケートを取り、「部活動検討委員会」を実施した。10月に魚沼市スポーツ協会と指導者への説明会を開く予定でいる。そして、11月に地域ミーティングというものがあるが、これはNPO法人エンジョイスポーツクラブの主催で県や国の方向性について地域に広くお話をしたり聞いてもらうミーティングを開き、そして、午後からは、魚沼市のそれぞれの立場の方々から様々な協議をしていただくという会である。11月6日に開催予定である。後ほどまた、アナウンスがあるかと思うのでよろしくお願ひしたい。それを受けて、12月は、部活動検討委員会を開催、部活動地域移行するということに関して、保護者、生徒への説明、地域移行の試行開始ということになる。令和5年・6年は移行していき、令和7年度末には休日の部活動については移行していきたいということになる。私からは以上である。

(内田市長) 今、説明いただいた中で質問等をいただきたい。「部活動検討委員会」というのがあると思うが、その内容というのは皆さん聞いたことがあるか。出席はしていないか。

(委員一同) 出席していない。

(内田市長) 「部活動検討委員会」の内容というのは、この地域移行の問題点も含めて、教育委員会からこの場で話すことはできるか。

(角谷管理指導主事) もちろん、今、示させていただいた地域ステップへの内容についての検討事項等を受けて大切な方策が出てきている。また、生徒にとってこういった活動が好ましいのか。そして、様々な立場から参加しているので、それぞれの立場から中学校の部活動についてこんな可能性や課題があるのではないかというようなことを意見をいただいている。ただ、具体的にこうすればいいという解決策がすでに出ないのがこの検討委員会で、何回か続いているところでもある。

(内田市長) 今程、説明いただいた中で、質問や意見を出していただきたいと思う。桑原委員はどうか。

(桑原委員) 先程、角谷先生のアンケートの説明で、資料を見させていただき、私が思ったことは、中学校で入りたい部活というのが大体3分の2くらいであって、わからないが3分の1くらいであること。あと保護者のアンケートの中での期待する「人間的な成長」ということになると、やはり個々を鍛えるとかチームワークの大切さとかそういった所を保護者は期待していると思うが、地域部活が休日になった時の部活動への心配が、「専門性がある指導者」というところであるが、実は、現在の先生方が専門性が高いかという点意外とそうでもないところもあり、保護者と学校の実際に指導している方の担当の意識の違いが少しあると思う。本当に全くの素人で、担当になってから少し自分で勉強してやっているような先生方も結構いる。もちろん、専門でバリバリやっている方もいるが、そういうところは個人差があるというところと、あと会場の送迎というところがどうしてもお金のかかる場所なので、保護者としても経済力もあるので心配になる部分なので、そこは少し丁寧に説明していただければと思っている。学校の部活動の専門性というところでは、保護者の方が思っているほど、高いところは多くはないかと思う。

(内田市長) 星委員はいかがか。

(星委員) まだ、少し自分の中に落とし込めていない部分もあるが、例えば、今、移行期間がこれから始まるわけで、休日の部分だけだと地域の方をお願いしているという感じだと思うが、例えば、それも、学校の管理下だからそれぞれの学校の判断ということになるのかもしれないが、平日の部活動をする部分は学校で行うから、私は平日に行う部活だけでいいとなったときに、例えば、同じ陸上部に入っていたとしても休日はそれをどういう風にとらえるのか、少し分からなくなっている。

休日の部活動も、学校の部活動の予定表に、例えば書かれていた場合、その子が例えば地域に下ろしたところに行きたくないとか、そこまでしなくてもいいとなった場合に、行かないという選択が出来るのかとか。逆に平日の学校の部活は行かなくても、いつも専門で教えてもらっている休日のだけに出たいとかそういう選択肢とかも出てくるものかとか。

(角谷管理指導主事) 今、現在の部活動の活動の意義についていうと、まずは、平日は練習試合とか大会参加とか出来ない状態にあるので、そこでトレーニングをしたり基礎的なことを学んだりルールを学んだりおそらくそういったことがずっと続いて、休日においてその成果を発揮する場所という捉えで休日の部活動が多くあると思う。そうなった時、休日はそういった場があって、それが地域になっていくと。当然それを選ぶのは生徒がしていると思う。今でも、例えば、自分はクラシックバレエを習っているので、吹奏楽部にいた

り卓球部に所属しているが、土日、休みについてはバレエの教室に参加するためにそういった活動には参加しない方がいてもおかしくないし、実際にそういう方もいると思う。それは今、部活動は全員加入されているわけではないので、その選択の中の一つということになっていくと思う。

(内田市長) 平日は練習をして、その力試しを休日にして、それはそれでいいが、その結果を見て、どこをどうしたらいいのかということは、監督とかコーチが見るわけだが、例えばどんな部活であろうが、大会に出た結果をみて反復練習をしてまた行くのだが、指導者が違うところが問題ないのかと感じる。

(角谷管理指導主事) そこはやっぱり連携をしていく必要があると思う。。

(内田市長) 口で「連携」というのは簡単だが、子どもたちが主役ということになると、よっぽど連携しないと子どもたちだって中学生だから違いが分かると思う。大会の時もキャプテンがいてキャプテンがどう思ったとか、吹奏楽のリーダーがこう思ったというのが、意見の相違でギクシャクしないか心配なところだし、子どもたちの成長にどう影響するのか、そこが一番心配である。

(角谷管理指導主事) そこは中学生なので、秀でているのもいればそうでもない子もいるし、チームでやらなければいけない、全体を見ながらやらなければいけないという部分もある。どういった活動をしていったらいいのかということを生徒自身が考えてどういったことで、練習が必要なんだということを主体的になって進めていくということが、今の学習もそうであるし、部活動においても必要なことだと思う。また、優秀な指導者がいてそれだけに頼りそれだけをやっていれば強くなれるんだ、上手くなれるんだだけではやはり充実していかないので、自分たちがどういうことが必要で、どんなことが課題で、その課題解決のためにどうやってやったらいいんだということを考えながら活動していく。そして、その活動をなくさないために地域があるんだというふうに思う。

(内田市長) 星委員がいわれたように、平日は選ぶが土日はやらない、または土日は選ぶが平日はやらないというときに、団体種目や、吹奏楽にもチームの中にいろいろポジションがあると思うが、そういう時に、平日はやるけどいかないといったときにチームとして成り立つか、それは有りなのかと他の子どもたちはそう思うと思う。それを選択肢に入れると、返ってチームワークの面で心配をしないといけないうように感じるが、子どもたちが主体ととなっているのか、よくわからない部分もある。

(角谷管理指導主事) 結局、その活動をやるにあたってそこに参加したいという意志がある子を拒絶をするのか、みんなで対話を持っていい活動していこうかというふうにとらえるか。私たちの目的はこういうことだから、あなたは参加してほしくないということで門前払いをしてしまうのか。そうではなく、今いる学校の仲間でこんなふうやってこういう立場や、こういう考えの人もいるっていうことを受け入れたり考えたり、ある程度課題として考えていったりしながら、その活動をどう続けていくか、どうやったら上手く行くかということ子どもたちがこれから考えていくことだと思うし、また大人側はそれに対する応援をしたりアドバイスをしたりする事が必要になってくると思う。

(内田市長) 分からなくはないが、皆さんはどうか。

(星委員) 例えばの話、何もしなくても足の速い子が、日曜日のそこにしか出ない場合に、

平日は、違うことがしたいということになった時のことについて。過去にあったのは日常の練習を積んだからこそ、そのメンバーに組み入れるけれど、その日頃の練習をしていなければそのメンバーには入れられません、大会にも出られませんという部活動はわりと多い。しかし、今回の話だと、大会には出たいし、日曜日の練習には出たいが、平日はしない、でも、例えば指導者が「いいよ、速いから。」と入れた場合にどれだけ育つか。あと、一生懸命努力して、その子より遅いが、毎日練習しているのにリレーのメンバーから外れたとかそういうのはどうなのかなって今聞いてて思った。でも、今、本当に多岐多様な視点で、それこそフレックス制ではないが自分で選んで3時から行くというような話も出てくるような時代なので、私は例えば大会には出ないけれどもとりあえず体を動かしたいから平日は出ますというのも選択肢の一つとして見ていくのかなと思いつつ今聞いていた。その辺を詰めていくと微妙な部分も出てくるのかなと思ったことと、移行期の部活動はこの2つの部活動で構成されるようになっていて、合同クラブと学校クラブでやっているってそういうこと、その辺がやはり落とし切れていなくて分からない部分である。

(角谷管理指導主事) あくまでイメージなので、実際の競技、種目、活動によって形は様々だと思っている。学校の種目がない競技をそこでやりたい、新種目というか学校の種目がないから他の学校の種目に参加したい、ということもある。

(星委員) そちらの方も、受入体制が出来ているかもまた心配なところである。

(角谷管理指導主事) それもやはり、これから先がこういう風になっていくのが多くなっていくという可能性が十分にある。

(星委員) 例えば、吹奏楽部がない学校で吹奏楽を一生懸命やっていて、でもやりたいからと日曜日のみ行って合同の吹奏楽部に入る、こちらは平日からやっていて大会出られるようになったときに、休日のみのときでも受入体制はOKという感じなのかどうか。

(角谷管理指導主事) 本人が決めていることになると思うが、やはり二刀流、三刀流、続けていける時間的余裕など、中学生にとってはかなり難しいハードルの高いものになるのではと思う。

(星委員) そうであれば、必要ないのではないかな。

(角谷管理指導主事) ただ、野球部に入りたいが今の学校には野球部がない、でも自分は野球がやりたいからと、今であれば、学区変更をして、転校してその学校に行って参加している生徒というのはたくさんいるので、今後、転校しなくても野球部の活動に参加することは可能になってくると思う。

(星委員) 平日も行けるということか。

(角谷管理指導主事) 時間的にはかなり厳しいので、頻度とか移動時間等を、具体的にしていけないといけないと思っている。

(星委員) 真剣にやりたいと思っている人になると、難しさを感じる。

(吉澤教育委員会事務局長) 今、角谷先生がお話したのは、令和5・6・7年の話なので、基本的には中学校の部活動がある状態だが、それ以降に「魚沼クラブ」というきちんとしたのがあり、平日もそういった活動がしたいという話までは、今のところ「部活動検討委員会」でも、まだそこまでの話には至っていないので、星委員がおっしゃったのは、ひょっとして最近のイメージなのかなと思って聞いていた。今お話をしているのは移行期、中

学校部活動の地域移行の範疇の話をしている。

(星委員) でも、移行期の子が、そこがどうなんだろうとされていて、出来上がった中に入っていくのであれば、3年間一生懸命やれるが、中途半端に移行となったときに、やはり本当は野球やりたかったのに、あとたった一年だったら辞めようかなって思ってしまったりすれば、やはり、今整っていないから、学区変更して入学考えようかなとなったりしても仕方ないかと思う。

(森山課長) 角谷先生が話されている移行期というのは、やれるものが何かというのをまず探して、例えば吹奏楽とか野球とかいうのは団結するのが非常に難しいということを少しお話してある。ですので、個人競技であるとかそういった場面でどういう形で学校同士で連携しあって行けるかというところがまずは入ってくるのかなというふうに想定はしている。

(星委員) 全体ではなくやりやすいところからということか。

(内田市長) 八木委員はどうか。

(八木委員) 今日、午前中に魚沼北中学校へ行った。数字だけでなく、直接行ってみて感じたことは、本当に学級数が少なく、子どもも少ない。校舎だけ見ると大きいけど、こんなに子どもが少なくなって部活がしたい、野球したいっていったときに、チームとして成り立つのかという数であった。「自分はこっちをやりたい」って思っても、実際あれだけ少なくなれば、私のいる宇賀地、堀之内地区も子どもの数が今ではかなり減っているのだから子どもたちの部活の選択肢がどんどん減り狭まっていくし、そうなった時に、確かに合同というか地区を越えて学校を越えてやる部活という形じゃないと子どもたちがやりたい選択肢がどんどん減っていくというのは分かるが、指導者も今どうなのかなと思って。まず見つけれられるのかなというのもあるし、自分も子どもが小さかった頃に、宇賀地にサイクリングクラブがあり、スポーツ少年団で地区の方々が自転車でボランティアでやって下さった方がいて何年か続いていたが、なかなか今は仕事をしてなおかつ休日にやって下さる方、今、指導者になれそうな方をどうやって発掘して行くのかなというのが気になる所である。

(樋口教育長) 大前提として、中学校部活動を移行していった際に、ゴールはどこかと思った時に、要するに部活動ではなくクラブチームで、今、小学生も学校から離れてスポーツ少年団（以下「スポ少」）に移ったが、中学生もそういった形になっていく。スポ少なのか、陸上競技協会なのか、各種スポーツ団体もあるし、あるいは民間のクラブチームだとかいろんな形があると思うが、でも中学生のその学校の部活動という形ができなくなるので社会体育や民間に移行していくというのが最終的なところなんだろうというふうに思っている。ただ、そこに急激に行けないし、子どもたちがやりたいことをきちんとできるということを、今考えているわけである。部活動検討委員会もその方法を考えている。その中で、移動や指導者について、様々な課題が出てきてはいるが、スポーツ庁はその重点3年間で移行を進めようとしている。確かに、魚沼市も子どもの数を見ていると、どんどん減っているのだから、できる活動は先細りになっているんだろうと思う。要するに、学校の部活動はそのまま存続し、土日については教員の指導から手を放そうかなというところがまず第一段階の計画で示しているところである。

なので、平日はこちらで休日はこちらを選ぶとかいうことはあまり想定しておらず、同じ小出中学校の野球部の活動がずっと続いているが、平日は教員が見ます、土日は地域の指導者が見ますという形での分担をしながら、先ほど話していたゴールに行くためにどうするかというのを考えていきたい。そして、中学校の野球部であれば土日、小学校のスポ少の団体が見てくれていたけど、スポ少の方でも平日も、もう一日くらい入れそうだよということになってくれば、段々そういう風に移行していきたいし、進めていきたいと思うが、様々な課題があり急にそこに行けないので、とりあえず市の方針としては学校部活動の土日を地域の指導者がやる形が1パターン。それから、魚沼北中学校のように、やりたいことが部活動として出来ていない、設置されていないのでやれない、という各種種目もあるので、そのことについては受け皿となる競技団体等を探しながら、全市でのクラブ活動が出来ないかという道を探っていく。そのための「魚沼クラブ」というのが、全市合同タイプである。今までは、それだと、全国中学校体育連名（以下：中体連）の大会に出られないとか様々な壁があったわけですが、中体連もそちらの参加を認めるとか、今、並行していろいろな情報が入って来ているので、やはり子どもたちがやりたいことをやれるためには「全市合同」という形も模索した方がいいという、二本立てで今追っているわけである。その「魚沼クラブ」がすぐ出来るかどうかは、その種目に団体があるのかどうか。野球が実際に始めてるいるが、週末一回だけ「魚沼クラブ」に入ったとしても、広神球場で週一日週末だけ。そこら辺は団体の指導者が充実してくれば、平日もう一回やるかとか、休日もう一回くらいやれそうだとか、そこら辺の交渉が進展してくるはずである。そんな風に理解している訳である。

(星委員) そうすると、やはり子どもも保護者も、ある程度きちんと把握をして、選択していく。今までは学校に入ってそこにあるものを選んで、当たり前のように流されてやってきたから、さほど保護者も子どもも疑問もなくきたが、今だと、選択肢も増えたと思うので、そうなればある程度、本人がきちんと大会メインでやるのか、人間性を求めてそこに入るのかってなった時にどのような活動を選ぶかとなる。

(樋口教育長) その辺は、勝利至上主義のクラブになった場合に、強い子ばかり集めて来るのではないかとか、様々な不安は出てきているが、学校教育の中の部活動ということで設定をしておけば、学校運営協議会とか学校の経営方針とかいう中で一線は引けるだろうというふうに思っている。だからこそ、この過渡期の時には、学校管理下の活動にしておいた方がいいかなと思っている。その中でやる中で指導者が居ないとかそういう問題が出てくると思うので、そういう解決を図りながらさっき言ったゴールの方に進んで行ければと思う。

それから、星委員が言われたように、選択肢は、今、我々の頃とは違って、すごく広がっていると思う。サッカーなどは、市内中学校の部活はないので、サッカーをやりたい子は、今、市外、南魚沼市とか十日町とか長岡とかのクラブチームに行っている。そのクラブチームでは「うちはこのクラブです。」という方針を出しており、どれがうちの子に合うのかというのを選んでそこに入る感じである。新潟市のどこの高校に行くのかとかを視野に入れつつ、ある程度、合宿とかそこに参加しやすいように引っ越していくんだという話も聞いているが、そういう面も含めて民間も含めて選択肢というか広がるし決めて

いかなければならないのだろうと思う。

(内田市長) 令和5・6・7年で移行して行って、その後は平日ということで良いか。

(角谷管理指導主事) 国は、やれる所は平日もどんどん移行して行っていいといっている。

ただ、実際には、仕事をしながら指導する方の確保が厳しい。最終的には、私も樋口教育長が言われたように、全部が地域のクラブに移行していくことになるのだと思う。地域クラブの中学生が、将来、指導者になったりOBとなって地域のクラブになっていくのが、環境を維持していくにも大事なことなのかなと思う。そういう環境が、魚沼市としてはあるのだということで色々なネットワークが広がったり、競技団体との交流があったり、そういった情報がさらに刺激しあっていいクラブを作っていくという、そういった地域クラブになっていくのが最終的にはいいことなのかなと思う。

(内田市長) 個人的な意見になるが、全国、同じやり方ではなく、例えば「魚沼市は部活動をやりません、平日も部活動をやりません」という考えもある。今年の会議でも話にあったと思うが、放課後の時間をどう過ごすか、どう利用するかを先生が教えたり、自分が行ったり、小出地域ではボランティアをしたりしている。指導していく学校の中などで、放課後は、部活じゃなくて、家に帰って、手伝いでもよし、稲刈りでも畑でも何でもいいし、勉強でもいいし、それ以外の自分の得意とすることや地域のことに参加してもよい「魚沼モデル」みたいなものを作る。そして、野球やサッカー、吹奏楽など、様々な受け皿が「魚沼クラブ」として、それを早く公表して、自分でそこに行くようにする。そうすれば、広神でも湯之谷でも小出でも入って一緒に活動できるようになる。

小学生のクラブでは、例えば、湯之谷小学校に須原小学校の野球が来て、一緒にやっている。湯之谷小学校の野球部は、最初は20~30人しかいなかったのが今60人位いる。須原小学校の子たちは練習するけど大会に出れないので入り、川に連れて行ったりスイカを収穫したり山へ登らせたり、楽しいことしているから部員が増えてきて、それを指導者や親と一緒に支えている。中学校に進んだときに、部活という言葉を使わないでこういうチームの活動場所があります、といったアナウンスをしたら良いと思う。

子どもだけでなく、指導者も減っている訳だから、次に続かないことも課題としてあると思うが、薬師のスキー学校では、6年生になると卒業するが、中学校に行くと辞めたくないといって毎年5人くらいアシスタントに入ってくる。その子どもたちが、指導員の資格を取って、若い指導者が増えて今指導者が40人位いて今も続けているということである。野球だろうがサッカーだろうが、今、指導者を見つけるのは大変だが、野球やるから帰ってくるって人もいるかも知れない。

部活動を、どうしてもやろうとしないで辞めます、と言っはいけないのか。

(角谷管理指導主事) 急激な変化というのは、やはり、生徒や保護者にとっては不安な要素といえると思う。

(内田市長) それをきちんと説明するのであれば良いと思う。例えば、中途半端に、平日はこちら、休日はこちらで、指導者が2人いて、送迎は誰がするんだ、責任は誰が取るんだとかいっていないで、組織や連絡協議会を作ります、運動させたかったらここに入れましょうという仕組みづくりをする。ただし、学校は、放課後をどう過ごすかということについては、子どもたちが集まって何をやってもいいし、そういう方が価値があると思えるが

どうか。

(星委員) そちらの方が、凄くすっきりして分かりやすくいいと思った。部活動という言葉は、何かやらなきゃいけないというイメージがある。いくら部活動は強制じゃないといながらも、子どもは何となく大勢を見るから、自分もやらなければいけないのかという風を感じるし、先程、内田市長が言われたように、部活を辞めて、新たな仕組みを作ってもらった方が、何も悩まずそこにポンと入って行って、そこで頑張れる気がするし、親も多分そちらの方がすっきりしてよいと思う。

(内田市長) 多分、小学生の親は、中学校の部活動というよりも、今やっているのが小学校の部活動ではなくて多分色々な活動をされていて、中学校に行ったら昔みたいに全員が部活に入るんだという感覚ではないと思う。部活動を、働き方改革に併せて、分かりづらく持ってくるのであれば辞めます、と。その移行期間が3年だと。そして、学校は平日の放課後をどう使うかということ进行全面に出して、研究して「魚沼モデル」のようなものを作る。どうするのかを全国で悩んでいる訳であるし。

(樋口教育長) 内田市長の言われたように、学校が部活動を離す、無くすとして、地域にあるNPO法人へ社会体育へあるいは文化活動へ移行していく、ということを考えたときには、学校が、学校部活動的なものは無くなります、ということは、もちろん選択肢の一つとして十分できていると思っている。令和8年度辺りからはそうします、と宣言すれば、そこに向けて準備も進められると思うし、実は、それが一番現実的だと思う。例えば、柔道は学校部活動があるところもあるが、小学生もスポ少の夜の活動に親が送ってみんなが行っている。そのスポ少は、大会は土日にあるし、種目によっては中学生もその大会と一緒にいる。だから、社会体育的な活動になった時に、受入団体として一番近いのはスポ少、あるいはその競技団体の活動だと思っている。ただし、それ平日にやろうと思うと指導者の関係で夜になってくる。バレーボールも夜やっているし、色んなスポーツのスポ少が夜にやっている。その分、放課後は勉強すればいいわけで、ちょっと順番を入れ替えるとかいうことへの指導や考え方をしていけば、こういう準備期間を経て、魚沼市は令和8年度から学校部活動は廃止します、という風な見通しを持っていくことも可能だと思う。

部活動は、学校の中で、学習の中では一応書かれているが、教育過程外で、必ずしも行わなければならないという活動ではないが、学校教育活動上、非常に有効な活動だという風に見られてきており、学校教育活動上の一環として継続してやってきたわけだが、今ここで大きな転換期を迎えている。国も、次の改定では、部活動を外すという風になっているので、その位の発想で進めていくのもいいんだろうと思う。ただ、市として何かを準備するというよりは、色々な団体の情報を整理して経験を積んでいくということが基本かなと思う。

(内田市長) だから、そこに力を入れてどういうものが出来るんだろうと。そこを検討委員会ではなくて、立ち上げ会にして、そして部活を辞めるというか廃止というのが一人歩きしないように、延長で子どもたちがどういう風に育てて行くか、クラブというものを先にやって、廃止ではなくて、有効な放課後とか子どもたちの色々な選択肢を広げるとか、そういう告知というか広報というかをこの3年間で行うようにするなどする。そして、今の3年間は、来年、中学1年生になる人は部活はありませんといっても、他に受け皿があれば

何の抵抗も無いと思う。「魚沼クラブ」があって、地域に限らず、やりたい人はここだと。土日に、どこの球場で練習だとか、今週はあそこで練習だとか、曜日の度に指導者は動けるわけだから、そのようにやるとか。再来年から廃止しますといっても、廃止が先行せず、丁寧に進め、指導者の人たちが分かりやすく集まりやすくし、受け皿がきちんとできていればよいと思う。それ以外のことは協議会を作り、教育委員会や市が出来る支援をする。

(星委員) すごい展開の話しになったと思う。

(内田市長) そうしろという意味ではないが。

(森山課長) 今の話の中だと、気になっているのが大会の関係になる。子どもたちは成果を試す場として大会があるが、その大会は、中体連が仕切っており、延々と歴史を重ねた組織で、なかなか動きが引き締まっている。内田市長が言われた意見は、非常に合理的な部分もあるので、中体連の今後の動きに注目していけたらと思う。

(内田市長) 子どもたちは中体連の大会でも他の大会でも、それほど意識はしてないと思う。

(吉澤教育委員会事務局長) 種目によっては、クラブの大会が無いと聞いている。中体連の大会が唯一であったりするものは、中体連に所属しないと出れない。

(内田市長) だから、中体連が、すべての競技をやっているわけだ。

(角谷課長) 中体連のみの種目というのがある。

(内田市長) 中体連が全部大会をやる。なので、出場条件を変えてもらえればいいのか。部活は地域移行といってるのに、土日の監督では出れませんと言っても、それはないという話になる。

(樋口教育長) 基本的に、中体連は、クラブチーム参加も認める方向で動いており、大会に対する考え方も次第に変わってくると思う。部活動を離す、地域スポーツに移すとなったときに、中体連がいつまで全国大会をされているかと思うし、種目によっては民間の大会などもあるし、逆に小学生あたりは、小さいうちから競技で全国大会に行っている問題性も段々指摘されてきているので、その辺は、中学校部活動が移行する中で、大会そのものの考え方や在り方も今後変わってくるんだろうなと私は思うので、あまりそれほど大会に出るために考えなくていいのかなとも思う。

(内田市長) スキーも、中越圏、全国とかあるが、前はポイント制だったが、今は、ポイント取らなくても、どの大会にも出られる。合宿に行ってポイントを取らなければとか、そういうことが今無くなっている。どの種目も、中体連は、大会にはクラブチームでも何でもチームで出れますという風に変えてもらい、子どもたちを盛り上げるというかそういう趣旨に変わってもらいたい。そこだけ、部活だ部活だいわれても、移行も出来るわけないと思う。

(樋口教育長) 中体連は、昨年2月に、地域クラブチームの参加を認める方向で、全国大会についても検討します、という方向付けをした。その予選会となる県大会についても、それに準じて、この12月以降に公表されると思うが、クラブの参加要件については、何でもいいという訳にはいかないのでは、詳しく規定されるというふうに認識している。ということから、部活動でなければ出れない、というのはこれから先も無くなっていくということは方向性としてはいい。

(内田市長) だから、部活動の地域移動、平日と休日というよりも、今の例え話の中での、平

日はもう部活をやらない、放課後の時間を作る、何をしたいかは個人のやりたいことを伸ばす。「魚沼モデル」ではないが、それういうものに力を入れる。そして、部活というか運動は本当にしたい子はこういう部をつくる。絵画や吹奏楽、習字、ダンスでも、指導者はいる訳だから、まずその基盤を作って、協議会を作って、そういうところに移行して部活は切り離す。大会は、そちらで力を入れてもらう方が、楽というかやりやすいのではないかな。

(星委員) そうなれば、すっきりする。今日も、先ほど、学力検査の話の時に、中学校は放課後の活動を、自分で設計を立てるような指導をしているという風におっしゃっていたので、それであれば内田市長が言われるように、自分がこれから帰って何時から勉強をして、何時からクラブ活動に行く、というような指導は中学校も出来ているということだと思う。今、既に時間を取って、何曜日は何度か時間取って考える時間を作っている訳なので。

(角谷管理指導主事) 大体の中学校は、帰ったら何をやるか、課題がどれくらいあるから、いついつまでにどうやるかという、一日の授業を振り返りながら帰った後のスケジュールを自分たちの中で決めて、そのうえで、家庭に帰っていくというのを多くの学校で取り入れている。

(内田市長) 先生方も一歩外れて、やりたいことに力を入れられるのではないかな。授業だけではなくて、この子はすごいことに興味をがありそうだから、それを伸ばすため指導や対話を出来る方が、自立というか個性を伸ばす方向に力を注ぐ魚沼市、の方が何か分かりやすい気がする。結論という訳ではないが。

(角谷管理指導主事) スポーツ団体や競技団体については、自分たちの競技の普及や競技力向上が大きな部分を占めており、それだけだと、勝利至上主義に陥ってしまうことが懸念される。どんどん強くなると、人間は、もっと強くなりたいと思うのが当たり前なので、それだけにならないために、手だてを打っていかなければならない。そこで移行の中では、指導者に対する研修制度を定めて、中学生時期の子どもたちの気持ちへの寄り添い方、支援の仕方について、指導者が学んでいき、その部分を広げていく必要があるという風に認識しているし、検討委員会の中でもそういった事を議論している所である。

(内田市長) 確かに、個人競技だろうが、団体競技だろうが、痛みの分かる指導者が必要である。今まで自分が強く育ってきたから「なんでお前は出来ないんだ」という指導者はどうかと思うし、やっぱり自分が怪我をして出られなかったときに、どういう苦勞をしたこととかを分かっている監督やコーチが良いと思う。そこら辺は、指導者の資質だという風に思うし、そういうことを勉強する機会があると良いと思う。

結論は出ないが、すっきりした方がよい、というのが答えだと思うので、その辺をまた参考にして貰いたい。

議事(2) その他

その他について、皆さんの方で、来年度予算を控えているが、何かあったら話していただきたい。昨年は、沢山意見を出していただいたが、市長の手紙とか語らん会とかで意見が出た「帰りのバス」の件や「中学校のトイレに生理用品を置く」件などはどうか。

(吉澤教育委員会事務局長) はい、来年度予算を伴うようなものについてはまだ何も委員の

皆さんに話してはいないが、お話が出たので少し申し上げると、バスについては、もう少し近いところから乗りたいというのは色々なところから話があり、今は、一定の基準を設けているが、夏の非常に日差しが強い時に、延々と歩くのは危険だというご意見をいただいている。そのことについては、その期間について別途検討したいと思っている。

また、生理用品については、校長会等を通じて、各学校で必要な処置をしてください、という言い方としており、教育委員会の意見の方向を示すというのは今のところないが、そういういわゆる生理の貧困という声があるのを受け、各学校で検討してもらっているような状況である。

(内田市長) 予算を伴う話しについても、教育委員会で話せば良いと思う。

(吉澤教育長) 教育委員会の月に1回の場合、どこまでの話をするという定めがないので、今申し上げたような話は、今まででいうと新年度予算の案が出てきたときに、説明する中で触れていたということが多かった。

(内田市長) 市長への手紙の中で、「夏に西日に向かって何 km も歩いて、暑くて暑くて靴を引きづりながら歩いている子どもを見たときに、冬しか歩くの大変だと思っていなかったが夏も暑くて大変なので、市長検討してください」と。それから、語らん会の時には、「生理用品はトイレに置いておけば、助かるんじゃないかと。今は保健室に置いてあるが、取りに行く時間もないし、部屋がよいのかトイレの個室に置くのがいいのか、係を決めて無くなったら係が補充していくとか、そういうことを教育した方がいいのではないかと」意見をいただいた。意見として上がってきたものの中で、出来ることはやった方がいいのではないかとと思っている。お金がかかることであるが、皆さんはどう思うか。

(星委員) バスのことは、そうして貰えると、小さい子も助かると前から思っていた。生理用品も、女性しか分からないが、トイレに置いてあると非常時に助かり、思春期なので、用品を持ってトイレに入ると恥ずかしい気持ちになる人も沢山いるだろうから、助かるだろうと思う。また、貧困で買えない話もニュースで出ているので、そうなったら女性はトイレに行きやすくなるんじゃないかなと思いつつ、今の話を聞いた。

(内田市長) 事務局の方は、その他ということで何かあるか。

(山田課長) 昨年、英検の受験率や補助金の申請件数が低いような話があったと思うが、本年度の申請状況どうか。

(須佐次長) 今年、第1回の英検が終わり、申請が出てきているが、昨年より増えている。今年は小学生も募集したところ、小学生からの申請が8件あり、中学生は現段階で昨年より10件位増えている。魚沼北中学校がまだ出てきていないが、同程度の増加と思われる。

(内田市長) 周知方法もあると思う。

(星委員) 中学校の保護者宛にメールで来ていた。第2回の英検について申請すれば出ますときちんと来ていたので、親は分かっていると思う。

(吉澤事務局長) 昨年は、実績で予算を余らせてしまったので、実績に応じて、今年予算は落としてはいるが、それでも昨年度よりは着実に増えている。

(樋口教育長) 今回、部活動について、魅力的なグッドアイデアな意見が出たので、ぜひ検討を進めたいなというふうに思った。ありがとうございました。

(内田市長) それでは、意見が出尽くしたということで、これで終了したい。また、9月の議

会が終わると、予算の時期に入るので、教育委員会の皆さんも、事務局の皆さんも、よく確認していただいた中で、予算編成に向かっていただければと思う。来年度からは、人材確保とか育成とか人づくりに徐々に移行して行くつもりである。そこを踏まえて予算編成をして欲しい、ということをおっしゃっていただいた。ハードの方では、役目を終えたものが沢山あるので、そこは引き続き対応しなくてはならないが、徐々に、現在の311億の支出予算が、令和5年には50億くらい減る想定となっているので、その分、人材育成の方、例えば子育てだとか教育などにシフトしていかないと、UIターンも来ないし、地元で勤める人も減少するしで、人口も米粒ずつ減っていったのが気がついたら茶碗1杯分なくなってしまふ。そうならないように、進めていきたいと思っているので、皆さんもよろしくお願ひしたい。それでは本日は終了する。ありがとうございました。

閉会